



*「絶対者のないところに歴史はありえない」…クリスト教の絶対神による「統一性と一貫性との意識が人間の生活に歴史を賦與」したとすれば、ぼくたち日本人がヨーロッパに羨望するものこそ、ほかならぬ近代日本における歴史性の缺如以外のなにものであらうか」(『近代の宿命』全二P460)。

*「統一性と一貫性」…とは、左圖における三角圖とC(神・絶対)の不動と言ふ事。そしてAB分離線(精神の政治學ライン)の下降(変遷)のみがあつたといふ事に、その歴史性(統一性と一貫性)の存在が「證明」されてゐると言ふことである。

*「近代化といふのは、先進國からでたものですが、近代化を作つたものは何かと言ひますと、やつぱり過去の歴史の動き(クリスト教の連續性、一貫性、統一性?)、生命力ですね。一つの共同體(クリスト教文化圏?)があつて、その共同體も個人も強い生命力を持つてゐて、無目標で動いていくうちに、近代化といふ一つの道ができたわけなんですね」[單:『生き甲斐といふ事』對談「近代化について」P173~4より]。

*歴史の意識(西歐)…「絶對者のないところに歴史はありえない」。

クリスト教の絶對神による「統一性と一貫性との意識が人間の生活に歴史を賦與」した。
⇒そしてその神(絶對者)そのものが「近代を過去のアンチテーゼとして成立せしめる歴史的一貫性」を形作つた。即ち西歐近代は「反逆すべき神」として中世を持つことが出来たのである。「神への叛逆も、じつは千年にわたるながいあいだの神への凝視と没入とから習得し免許をあたへられた理想人間像にもとづいておこなはれたものである」(P599『小説の運命Ⅰ』)⇒「なぜなら神と言ふ統一原理はその叛逆において効力を失ふものではなく、それどころか叛逆者の群れと型とを統一しさへする」⇒どのやうに統一していつたかと言へば、近代西歐精神を「神に型どれる人間の概念の探究」と言ふ形で統一していつたのである。

(参照:『近代の宿命』P462、及び同小生發表文中「西歐歴史的統一性:圖解」及び『現代人の救ひといふこと』)